第1問　次の例文の空欄に当てはまる言葉を選択肢から一つ選んでその記号を書き、その言葉の読みを記述しなさい。

例文

（1）執行部の方針は、現場の実態と□している。
（2）著名な専門家の考えだからといって、□なわけではない。
（3）情報を吟味し、将来の動向を□する能力が求められる。
（4）様々な文献を読み漁（あさ）り、理論の□となる知見を探す。
（5）次の会議では、持続可能性に関する取り組みを□に載せる。
（6）たくさんの事例から□化して、それらに共通する原理を明らかにする。
（7）今回の災害で、インフラの□性が明らかになった。
（8）あの作家の文章は語彙が少なく、表現も非常に□だ。
（9）自分の意見に対する強烈な批判に対して□する。
（10）社内研修の効果を評価する□を設ける。

選択肢

（ア）指標　（イ）反駁　（ウ）露呈　（エ）包含　（オ）洞察　（カ）依拠　（キ）傍証　（ク）軋轢
（ケ）啓蒙　（コ）乖離　（サ）随意　（シ）稚拙　（ス）俎上　（セ）破綻　（ソ）抽象　（タ）盲信
（チ）脆弱　（ツ）無謬　（テ）逓減　（ト）範疇

第2問　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

「ポピュリズム」というのは定義のむずかしい言葉である。政治用語として[i]ひんようされているが、それは必ずしもその語の定義についての集団的合意が成立していることを意味しない。

術語の定義は、ふつう同一カテゴリーに属する他の語との差異に基づいて理解される。だから、「民主主義」の定義ははっきりしている。democracyは誰が主権者であるかによる分類法であるから、これの対義語は「王政(monarchy)」や「貴族政(aristocracy)」や「寡頭政(oligarchy)」や「無政府状態(anarchy)」などである。だから、誰かが「民主主義を廃絶せよ」と主張したとすれば、その人は代替するどれかの政体の支持者であることを明らかにしなければならない。

だが、①「ポピュリズム(populism)」はそうはゆかない。というのは、ポピュリズムについては、その対義語が何であるかについての合意がまだ存在しないからである。

欧米の政治学の論文を読むと、ポピュリズムはほぼ例外なく「これまでの秩序を揺るがす不安定なファクター」という意味で使われている。だが、そのときの「これまでの秩序」が何を指示するかはその語が利用される文脈によって、ひとつひとつ違っている。だから、トランプの統治についても、ドイツの移民政策についても、イギリスの貿易政策についても、ヴァチカンの宗教政策についても、「これまでの秩序」を揺るがす動きには「ポピュリズム」というタグが付けられる。それらのすべてに一貫している定義を取り出すことは難しい。

こういうとき、[ii]いちい的に定義されていない語でものごとを論ずる愚を冷笑する人がいるけれど、私はそれには与(くみ)さない。「いちい的に定義されていない語」がひんようされる場合には、間違いなくそこには「これまでの言葉ではうまく説明できない新しい事態」が発生しているからである。そういう場合は、用語の厳密性よりも、「新しい事態」の前景化を優先してよいと私は考えている。

では、ポピュリズムといういちい的な定義が定まらない語によって指称されている「新しい事態」とは何なのか？

私見によれば、ポピュリズムとは「今さえよければ、自分さえよければ、それでいい」という考え方をする人たちが主人公になった歴史的

過程のことである。

個人的な定義だから「それは違う」と口を尖らす人がいるかも知れないけれど、別にみなさんにこの意味で使ってくれと言っているわけではない。

「今さえよければいい」というのは②時間意識の縮減のことである。平たく言えば「サル化」のことである。「朝三暮四」のあのサルである。

春秋時代の宋にサルを飼う人がいた。朝夕四粒ずつのトチの実をサルたちに給餌していたが、手元不如意になって、コストカットを迫られた。そこでサルたちに「朝は三粒、夕に四粒ではどうか」と提案した。するとサルたちは激怒した。「では、朝は四粒、夕に三粒ではどうか」と提案するとサルたちは大喜びした。

このサルたちは、未来の自分が抱え込むことになる損失やリスクは「他人ごと」だと思っている。その点ではわが「当期利益至上主義」者に酷似している。「こんなことを続けていると、いつか大変なことになる」とわかっていながら、「大変なこと」が起きた後の未来の自分に自己同一性を感じることができない人間だけが「こんなこと」をだらだら続けることができる。その意味では、データをごまかしたり、仕様を変えたり、決算をiii ふんしょくしたり、統計をごまかしたり、年金を溶かしたりしている人たちは「朝三暮四」のサルとよく似ている。

「朝三暮四」は自己同一性を未来に延長することに困難を感じる時間意識の未成熟（「今さえよければ、それでいい」）のことであるが、「自分さえよければ、他人のことはどうでもいい」というのは③自己同一性の空間的な縮減のことである。

集団の成員のうちで、自分と宗教が違う、生活習慣が違う、政治的意見が違う人々を「外国人」と称して排除することに特段の心理的抵抗を感じない人がいる。「同国人」であっても、幼児や老人や病人や障害者を「生産性がない連中」と言って切り捨てることができる人がいる。彼らは、自分がかつて幼児であったことを忘れ、いずれ老人になることに気づかず、高い確率で病を得、障害を負う可能性を想定していないし、自分が何かのはずみで故郷を喪い、異邦をさすらう身になることなど想像したこともない。見知らぬ土地を、飢え、渇いて、さすらい、やむにやまれず人の家の扉を叩いたときに、顔をしかめて「外国人にやる飯はないよ」と言われたときにどんな気分になるものかを想像した

ことがない。

自分と立場や生活のしかたや信教が違っていても、同じ集団を形成している以上、「なかま」として遇してくれて、飢えていればご飯を与えてくれ、渇いていれば水を飲ませてくれ、寝るところがなければ宿を提供することを「当然」だと思っている人たち「ばかり」で形成されている社会で暮らしている方が、そうでない社会に暮らすよりも、「私」が生き延びられる確率は高い。噛(か)み砕いて言えば、それだけの話である。

「倫理」というのは別段それほどややこしいものではない。「倫」の原義は「なかま、ともがら」である。だから「倫理」とは「他者とともに生きるための理法」のことである。他者とともにあるときに、どういうルールに従えばいいのか。別に難しい話ではない。「この世の人間たちがみんな自分のような人間であると自己利益が増大するかどうか」を自らに問えばよいのである。

例えば、渋滞している高速道路で走行禁止の路肩を走るドライバーは他のドライバーたちが遵法(じゅんぽう)的にじっと渋滞に耐えているときにのみ利益を得ることができる。全員がわれ先に路肩を走り出したら、彼の利益は失われる。だから、彼は「自分以外のすべての人間が遵法的であり、自分だけがそうでないこと」を、つまり、「自分のようにふるまう人間が他にいない世界」を願うようになる。

これが「非倫理的」ということである。

これはある種の「呪い」として機能する。だって「私のような人間がこの世に存在しませんように」と熱心に祈っているわけなんだから。この「呪い」は弱い酸のようにゆっくり、でも確実に彼の生命力を殺(そ)いでゆくことになる。祈りの力を[iv]あなどってはならない。

もう一度言うが、倫理というのは別に難しいことではない。今ここにはいない未来の自分を、あるいは過去の自分を、あるいは「そうであったかもしれない自分」を、「そうなるかもしれない自分」を「自分の変容態」として、受け容(い)れることである。そのようなすべての「自分たち」に向かって、「あなたがたは存在する。存在する権利がある。存在し続けることを私は願う」という祝福を贈ることである。

④倫理的な人というのが「サル」の対義語である。

だから、ポピュリズムの対義語があるとすれば、それは「倫理」である。私はそう思う。たぶん、同意してくれる人はほとんどいないと思うけれど、私はそう思う。

自己同一性が病的に[v]いしゅくして、「今さえよければ、自分さえよければ、それでいい」と思い込む人たちが多数派を占め、政治経済や学術メディアでそういう連中が大きな顔をしている歴史的趨勢（すうせい）のことを私は「サル化」と呼ぶ。

「サル化」がこの先どこまで進むのかは、私にはよくわからない。けれども、サル化がさらに亢進（こうしん）すると、「朝三暮四」を通り越して、ついには「朝七暮ゼロ」まで進んでしまう。論理的にはそうなる。そのときにはサルたちはみんな夕方になると飢え死にしてしまうので、そのときにポピュリズムも終わるのである。

哀しい話だ。

「サルはいやだ、人間になりたい」という人々がまた戻ってくる日が来るのだろうか。来るとよいのだが。

内田　樹　著　「サル化する世界」文藝春秋、二〇二〇年、二〇ページ～二五ページ、一部改

問一　傍線部i～vのひらがなを漢字で書きなさい。

問二　傍線部①『ポピュリズム（populism）』はそうはゆかない」について、この意味を解説した次の文章において、空欄【　ア　】【　イ　】に入る語句を答えなさい。本文を抜き出すだけで済む場合は、そうしてよい。空欄【　ア　】は4文字以内、空欄【　イ　】は2文字以内で答えなさい。

「ポピュリズム」という語の対義語が何であるかについての合意がまだ存在しない。よって、「ポピュリズム」と、ある側面では【　ア　】、別の側面では異なった意味を持つ語を設定して、それと【　イ　】することによって「ポピュリズム」の語を定義したり、その意味を理解したりすることが、困難である。

問三　傍線部②「時間意識の縮減」について、この意味を解説した次の文章において、空欄【　ア　】【　イ　】【　ウ　】に入る語句を答えなさい。本文を抜き出すだけで済む場合は、そうしてよい。空欄【　ア　】は5文字以内、【　イ　】は5文字以内、【　ウ　】は15文字以内で答えなさい。

【　ア　】が抱え込む損失やリスクを自分自身のそれと感じることができず、【　イ　】が便益を享受することに【　ウ　】こと。

問四　傍線部③「自己同一性の空間的な縮減」について、この意味を解説した次の文章において、空欄【　ア　】【　イ　】に入る語句を答えなさい。本文を抜き出すだけで済む場合は、そうしてよい。空欄【　ア　】は3文字以内、【　イ　】は8文字以内で答えなさい。

> 自分と同じ集団の成員であるにもかかわらず、自分と立場や生活のしかたや信教などが異なっている人たちのことを【　ア　】と認識することができずに切り捨て、巡り巡って自分自身の利益さえ【　イ　】可能性を生むこと。

問五　傍線部④「倫理的な人というのが『サル』の対義語である」と言える理由として、以下の（ア）～（オ）のそれぞれの文が正しい場合には○、間違っている場合には×をつけなさい。

（ア）サルは倫理的な人のようには、祈りの力を発揮して利益を追求することはできないから。

（イ）サルは倫理的な人のようには、未来の自分が被るリスクを想像できないから。

（ウ）サルは倫理的な人のようには、現在の損失や利益を未来のそれらと比較することができないから。

（エ）サルは倫理的な人のようには、現在の自分と未来の自分の自己同一性を認識できないから。

（オ）サルは倫理的な人のようには、自分の変容態として他人を受け容れることができないから。

第3問　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

世界で最大の花として知られるラフレシアは、直径が一メートルにもなる巨大な花である。十九世紀にイギリスの探検隊によって発見された当初、ラフレシアは、人食い花でないかと考えられた。何しろ、ラフレシアは、地面の上に大きな花がぱっくりと口を開けているのだ。

じつは、ラフレシアも寄生植物である。

ラフレシアは、ブドウ科植物の根に寄生し、栄養分を吸い取っている。そして、そこから直接花を咲かせるのである。植物にとってもっとも重要な器官は種子を残すための花である。極端な言い方をすれば、茎を伸ばし葉を広げて成長することは、すべて花を咲かせるためなのだ。そう考えればラフレシアは、余分な茎も葉もなく、花だけを咲かせる理想的な形である。

それだけではない。ラフレシアには、養分を吸収する根さえない。ラフレシアは糸状に細胞が並んだだけの、寄生根と呼ばれる器官をブドウ科植物の根に食いこませている。もはや自力で立つことも必要ないので、しっかりとした根は必要ない。点滴チューブのような細い寄生根だけで十分なのである。

それにしても、世界一大きな花が自活しない寄生植物というのも、世の不条理を感じる。しかし、余分なものをそぎ落とし、茎も葉もない植物だからこそ、全てのエネルギーを花を咲かせることに振り向けることができる。その結果として、ラフレシアは巨大な花を手に入れることができたのである。

つる植物の例として紹介したアサガオの仲間にも寄生植物が存在する。その名は、ネナシカズラという。ネナシカズラは「根なし蔓（かずら）」という意味である。

ネナシカズラは、光合成をする必要がないので、光合成のための葉緑素はない。そのため、もやしのように軟弱な黄白色をしている。誰かに養ってもらうパラサイトのような生活は、よく「ひも生活」と表現されるが、ネナシカズラの姿は、まさに「ひも」なのである。

根なしとはいっても、芽を出したばかりのネナシカズラは根を持っている。そして、獲物を求めて茎は地面を這（は）っていくのだ。不思議なこ

とに、人工的な支柱や、すでに弱った植物には見向きもしない。獲物を狙う蛇さながらに、あたりの植物を撫(な)でまわしながら、活(い)きのいい植物の茎を選んで巻きつくのである。そのメカニズムは明らかにはなっていないが、ネナシカズラは、宿主植物が発するわずかな揮発成分を感知しているのではないかと考えられている。

そして、獲物に食らいついたネナシカズラは、もはや必要のなくなった根を消し去って、本当に「根なし」になる。そして、根から養分を吸収する術(すべ)を失ったネナシカズラは獲物の体に巻きつきながら、つるから牙のような形状の寄生根をつぎつぎに出して獲物の体に食い込ませ、栄養分を吸い取るのである。その姿から、ネナシカズラは、「黄色い吸血鬼」と呼ばれて恐れられているのである。

枝を広げ、葉を茂らせて、激しく空間を争い合う植物。しかし、植物どうしの戦いは、地面の上だけではない。地面の下では、さらに激しい戦いが繰り広げられている。

植物は根を張りながら、根から、さまざまな化学物質を出す。そして、まわりの植物にダメージを与えたり、他の植物の種子からの発芽を阻害したりして、他の植物を撃退するのである。

このように、化学物質を介して、他の植物の成長を抑制することは「アレロパシー」と呼ばれている。アレロパシーは、ギリシャ語で「互いに感受する」という意味の造語である。そのため、本来の意味では、植物どうしに限らず、植物と微生物や昆虫あるいは、微生物どうしなど、すべての生物間の干渉作用を言う。また、必ずしも生育を抑制するだけでなく、生育を促進するような効果を及ぼす場合も含まれる。ただし、一般的にはアレロパシーは植物間の競合において、ある植物が出す物質が、別の植物の生育を阻害する場合に用いられている。

古くからクルミの木の下や、アカマツの木の下には下草や他の木が生えないことが知られていた。これはクルミやアカマツの根から出る物質が、他の植物の成長を阻害しているのである。

多かれ少なかれ、ほとんどの植物がアレロパシー活性のある物質を持っている。穏やかに見える植物の世界も、日々、化学兵器を使った争いが繰り広げられているのである。

強いアレロパシー作用を持つ植物として、セイタカアワダチソウが知られている。

セイタカアワダチソウが、河原や空き地などに一面に生えているようすをよく見かける。セイタカアワダチソウは、根から出す毒性物質によって、ライバルとなるまわりの植物の芽生えや生育を抑制し、自分の成長を優占的に行う。こうして、他の植物を駆逐して、一面に大繁殖するのである。まさに、恐ろしい化学兵器を使っているのだ。

しかし、である。いつの頃からかセイタカアワダチソウに一時の勢いがなくなった。あれほど猛威を振るっていたはずの、セイタカアワダチソウが、衰退しつつあるという現象が起きているのである。一時は駆逐されかけた、ススキやオギなどの日本の野草が盛り返して、セイタカアワダチソウを圧倒している例も少なくない。

セイタカアワダチソウの名は、背が高いことに由来している。その名のとおり、日本では二〜三メートルもの高さになる。ところが、最近では、五〇センチ程度で花を咲かせているようすも、よく見かける。

どうして、あれほどの猛威を振るっていたセイタカアワダチソウが、おとなしくなってしまったのだろうか。

この原因の一つは「自家中毒」にあると言われている。セイタカアワダチソウは、毒性のある化学物質でまわりの植物を次々に駆逐していった。そして、セイタカアワダチソウが独り勝ちしてしまったのである。ところが、他の植物がなくなると、相手を攻撃するはずのセイタカアワダチソウの毒は、セイタカアワダチソウ自身に影響して、自らの成長を妨げるようになってしまったのである。

ところが、不思議なことがある。

セイタカアワダチソウは、北アメリカ原産の外来雑草である。その原産地の北アメリカでは、セイタカアワダチソウは、けっして大繁殖していない。

そもそも、祖国の北アメリカの草原では、けっして背も高くなく、一メートルにも満たない高さである。そして、秋の野に咲く美しい花として人々に親しまれている。猛威を振るうどころか、セイタカアワダチソウが咲く草原の自然を守ろうと、保護活動まで行われているくらい

である。

そもそも、セイタカアワダチソウが日本にやってきたのは、美しい花を園芸的に利用しようと日本に導入したのが最初である。その美しい花が、どうして、異国の日本では、猛威を振るっていたのだろう。

北アメリカでも、セイタカアワダチソウは同じように、根から化学物質を出している。じつは、すべての植物が多かれ少なかれ、根から化学物質を出して、まわりの植物を攻撃している。こうしてお互いに化学物質を放出しあう化学戦争が繰り広げられているのだ。しかし、それに簡単にやられていたのでは戦いにならないから、まわりの植物は、それに対する防御の仕組みも発達させてダメージを防いでいる。そして、攻防のバランスがとれることによって見た目にはアレロパシーがないかのように見えているのである。

アメリカでは、セイタカアワダチソウと大昔から戦いながら進化を遂げてきたまわりの植物は、セイタカアワダチソウが出す毒成分に対する防御の仕組みを発達させている。こうして、バランスがとれているので、セイタカアワダチソウばかりが広がってしまうということはないのだ。

ところが、日本の植物は、新しく帰化したセイタカアワダチソウの化学物質に対して、防御する仕組みを持っていなかった。もちろん、日本の植物も根からさまざまな物質を出すが、セイタカアワダチソウを攻撃する効果的な物質を持っていなかったのかも知れない。そのため、バランスを取ることができずに、セイタカアワダチソウは背が二〜三メートルにも高くなる巨大なモンスターと化して、大暴れをしてしまったのである。

しかし、お互いの攻撃の中でバランスを保っていたセイタカアワダチソウにとっても、独り勝ちは初めての経験であった。そして、結果的に自らの毒で身を滅ぼすことになってしまったのである。同じように日本では野草として親しまれているイタドリやススキも、海外に渡るとモンスターと化して大雑草として問題になっている。

穏やかに見える植物も、地面の下ではお互いに攻撃し合っている。しかし、植物の世界は、それでバランスを保っているのだから、自然界というのは、すごいものである。

稲垣　栄洋　著「たたかう植物――仁義なき生存戦略」筑摩書房、二〇一五年、二四ページ〜三二ページ、一部改

問一　この文章を280文字以上300文字以内で要約しなさい。

問二　この文章における筆者の主張を70文字以上80文字以内で書きなさい。